

清水港で観光・新産業

静岡市の清水港湾地区の将来像を巡る議論が本格化してきた。複数の協議組織が発足し、港湾機能の強化のほか、大型クルーズ船などが寄港する観光拠点、既存産業を生かした新産業創出拠点など様々な視点から将来像を描き始めた。2019年春からの開港120周年記念事業の準備も進む。港町の再生に向け、官民の取り組みが動き出した。



日の出埠頭には2020年4月に国際クルーズ船の旅客ターミナルができる

将来像巡る官民議論本格化

清水港湾地区では多くの計画が進む

清水港長期構想委員会

- 2019年3月までに新長期構想を策定

清水みなとまちづくり公民連携協議会

- 19年3月までにグランドデザインを策定

開港120周年記念事業

- 19年4月～20年3月
(主な事業は19年7～8月)

国際旅客船拠点形成計画

- 20年4月に日の出埠頭で旅客ターミナルが完成
- 20年4月に日の出埠頭を整備
(超大型クルーズ船に対応)

物流機能強化

- 20年3月に中部横断自動車道が全線開通予定
- 20年4月 新興津ターミナルに民間4社の大規模物流ターミナルが完成

新産業育成・研究施設整備

- 19年9月に国際マリンバイオテクノロジー学会を開催
- 21年に国際深海生物学会がシンポジウムを開催
- 日の出埠頭を中心にした海洋文化都市を整備(時期未定)

物流機能も強化

「19年の清水港は新たなモビリティ(移動手段)の実験場になる」。6月に設立した清水港開港120周年記念事業実行委員会(会長は芝浦工業大学教授)は、来月には清水港長期構想検討委員会も発足する。船船の大型化や物流の将来のグランドデザインを提言する。港湾だけ

を取り巻く環境が大きく変化。19年度には中部横断自動車道も全線開通する予定で、清水港を結ぶ物流網も多様化する見通しだ。これらを踏まえ、検討委は04年に策定した現在の長期構想を見直す方針で、「20年後の将来像を18年度中に策定する」(奥港湾企画課)。

20年4月には国際クルーズ船運営大手のゲンテイン香港が清水港の日の出埠頭に整備する旅客ターミナルが完成する。同社は清水港を東アジアの市では19年9月に国際マリンバイオテクノロジー学会を開催。国際深海生物学会も21年にアジア初のシンポジウムを静岡市で開くことを決めた。

4月に発足した清水みなとまちづくり公民連携協議会の前田英寿会長(芝浦工業大学教授)は、19年3月までに、清水港の将来のグランドデザインを提言する。港湾だけ

清水港ではこうした観

光需要の増加に加え、既存産業を生かした海洋分野での新産業育成や研究施設の整備も視野に入れる可能性が高い」とみている。

前田会長は「観光と新産業が地域経済をけん引する新しい形の港町になる」と話している。